令和五年度京都大学書道部第百三十一回書展

■場所　建仁寺　西来院・禅居庵

■時間　六月十日（土）十時半時～十七時
六月十一日（日）十時～十六時

■入場無料

巻頭に寄せて

京都大学書道部　部長　須田光太郎

本日はご多忙の中、第一三一回京都大学書道部書展「初夏書展」にお越しいただき、ありがとうございます。

先月八日を区切りに、人々を悩ませ続けた「禍」が収束したとされ、生活が元通りになろうとしてきています。本書道部でも、できる活動の幅が増え、部員数も増える中で、慎重にではありますが、元の活気がなるべく早く戻るよう、日々活動を進めています。

その中でですが、部員のひとりひとりが「何を楽しく感じるのだろうか」という小さな疑問を感じています。また、こうして書展に足を運んでくださる皆様にとっても、「何を楽しく感じるのか」というのは、とても気になるところです。

もちろんこれは書にとどまった疑問ではないのですが、では、書に関しては、みなさんは何を楽しく感じているのでしょうか。何をしているときに書を楽しく感じるのでしょうか。

打って変わって自分にこの質問を投げかけてみると、これがなかなか難しい疑問です。普段から書のみをしているわけではないですが、締め切り前などは一日中、あるいは一晩中書き続け、考え続けることもあり、そのときには本当に苦行のような辛さを感じます。そうやって出来上がった作品も、愛着だけが湧くわけではなく、どうしても粗が見つかってしまって、愛せないまま終わってしまうことも少なくありません。制作段階でも、様々な葛藤や、自分の未熟さにストレスを感じることも多々あります。

ではどこに楽しさを感じるか、と考えると、やはり書いているその瞬間が一番楽しいのではないかなと思います。臨書でも創作でも、一本の線を、どう引けばよいか様々な選択肢を考え、決断し、筆を持ち、実際に引き、引いたものをよく観るという一連の動作がありま す。それに没頭しているときが一番楽しいように感じます。

これは自分の感覚ですが、書活動の集積自体はなんら楽しいだけのものではありません。しかし同時に、それが作品となるわけですし、一見したときの書そのものでもあります。とても厳しいものです。しかし、その内実、つまりは書いている瞬間、書いていることそのものに没頭している時間は、言い表せないほどの楽しさに満ちていると思います。書作品を観ることの楽しさも、結局は作品に凝縮された、書くことの楽しさをなぞることが楽しいと言えるのかな、とも感じます。それを感じるためにまた、書いている楽しさを感じる経験が不可欠とも感じます。

個人的な意見をつらつらと述べましたが、改めまして、皆様は書の、あるいは他の様々な時間の、どういうことが楽しく感じるでしょうか。お時間があればぜひ、皆様の答えも聞いてみて、自分にとっての新しい「楽しさ」を見出すきっかけにしたいものです。

さて、末筆で失礼いたしますが、平時よりお世話になっております顧問の成田健太郎先生、行友三輪子先生、また技術顧問の大原蒼龍先生に感謝を申し上げて、挨拶とさせていただきます。

令和五年吉日

それは本物の蛇でしたか？

成田健太郎（京都大学大学院文学研究科准教授）

東坡居士（とうばこじ）の号で知られる中国・北宋の蘇軾（そしょく）に文与可（ぶんよか）といういとこがあり、こんな文章を書きました。

私は十年ほど草書を習ったが、古人が伝えてきた用筆法が、ついに呑みこめなかった。その後、路上で闘っている蛇を見てから、その妙訣を悟った。

そしてそれを読んだ蘇軾は、こんなコメントを付けています。

古人に草書の好きな人がいて、ある夜、夢に蛇がからみあっているのを見、数年後また白昼にそれを見て、草書が上達した。与可の見たのは、はたして本物の蛇だったのであろうか、それとも草書の精だったのであろうか。私は日ごろよく与可と激論したり大声で笑い興じたものだが、この話を与可に聞かせて、彼に腹をかかえて笑いこけさせることのできないのが残念である。（二玄社『中国書論大系』第四巻「東坡題跋」杉村邦彦訳を参照）

蘇軾は要するに、文与可は寝ても覚めても草書のことばかり考えていたので、路上で草書の複雑にからみあった曲線を幻視し、それを蛇と思いこんでしまったのではあるまいかと、冷静に分析しています。たしかに事実はそういうことなのかもしれませんが、趣味に一生懸命になっている人に対して、なんとも失礼な茶々を入れてくるものです。

ただ、蘇軾と文与可は、日ごろから忌憚のない意見をふっかけてはじゃれあえる、気のおけない間柄だったようです。そして、蘇軾の口ぶりからすると、文与可はすでに他界していて、楽しく語りあったあの頃を懐かしんでいるのかもしれません。いずれにせよ、同じ趣味に熱中しながら、お互いを冷静に見守り、時に戒め、明るく励ましあえる仲間というのはなかなか得がたいものです。

今回の書展にも、そんな人間関係のなかから生まれてきた作品があるのでしょう。

「書の王道とは」

大原蒼龍（技術顧問、日展会友　書家）

書を学ぶに、古法帖や古碑帖が載っている本を手に取り、見よう見まねで臨書を繰り返す。色々な事を考え、感じ、時間と枚数を重ねて古典を体内に吸収していく。「古典を習う」とは、その古典の美を体内に、細胞に宿すまで学ぶ事を言うのだと考える。そして、作品作りに向かっていく。

その時に、どのような古典に目を向けるのか。これが、その人の書の美を作り上げていく上で非常に重要なところとなる。若き内は「気に入ったものを手当たり次第に。」で良いと考える。然し乍ら、奇抜なものや気を衒った物ばかりに目を向け続けてしまうと、書の本質を見失いかねない。

書は、三千数百年という長い歴史があり、数多の名品と書人が生まれてきた。書道史は、書体変遷の書体史とそれ以後の書法史で区別され、その基点となるのが王羲之である。王羲之を学書の中心として考え、その歴史的な流れに身を置いて古典を探し出すのが最善と考える。

王羲之の書と美術性は、雲を掴むように難しく、一筋縄では行かない。私が尊敬する芸術家の一人である高村光太郎の書論に、王羲之とその他の書に対して妙を得た言葉を残しているので次に紹介する。

書はもとより造型的のものであるから、その根本原理として造型芸術共通の公理を持つ。比例均衡の制約。筆触の生理的心理的統整。布置構造のメカニズム。感覚的意識伝達としての知性的デフォルマシヨン。すべてそういうものが基礎となってその上に美が成り立つ。そういうものを無視しては書が存在し得ない。書を究めるという事は造型意識を養うことであり、この世の造型美に眼を開くことである。書が真に分かれば、絵画も彫刻も建築も分かる筈であり、文章の構成、生活の機構にもおのずから通じて来ねばならない。書だけ分かって他のものは分からないというのは分かりかたが浅いに外なるまい。書がその人の人となりを語るということも、その人の人としての分かりかたが書に反映するからであろう。

「書について」（高村光太郎）

高村光太郎は書に対する造詣が深く、心を穿つような素晴らしい書も残している。彼の芸術論や哲学には、心新たに感銘を受けることが常である。

私の中で、王羲之の書は「水」のようなもの。と、捉えている。生命の根源であり必要不可欠なもの。また、あらゆる物を浄化してくれる。形はなく如何様にも変化できる。

人生の勉強に限らず、書学においても「回り道」は必ず益になる。しかし、「書の王道とは何か」「書の本質とは何か」と哲学し続けながらの回り道であって欲しい。

作品制作の方法―臨書と創作―

臨書

歴史上の優れた書の古典を手本として、それを真似て書くことを臨書と言います。書道の学習で最も基本となる方法で、伝統的には次の三つの段階を踏むのが良いとされます。

(1) **形臨**　文字の形や筆遣いを似せて書くことです。古典をよく観察し、できるだけ古典に近づけて書くことが学習の出発点となります。

(2) **意臨**　形に拘らず、古典の雰囲気や精神を汲み取って書くことです。意臨が重視されるのは、形だけを追っていると時に筆運びのリズムが失われ、浅い印象の書になってしまうことがあるからです。また、古典の中には模本（敷き写し）や拓本（石に刻し、それを墨で写しとったもの）だけが残り、元の姿が伝わっていないものもあります。そのようなものを臨書する際には、想像力を働かせて書くことが必要です。

(3) **背臨**　古典を見ずに、記憶を頼りに再現して書くことです。古典をいかに観察し、理解しているかが問われます。

形臨、意臨、背臨と進むにつれて、臨書には書き手の個性が強く現れるようになります。臨書は単なる模倣ではなく、一つの表現方法なのです。臨書作品は、そのような学習の成果を作品として形にし、発表するものです。

臨書の対象となる古典が載る冊子を法帖と言います。初めから芸術作品として制作されたものもあれば、石碑や手紙、文章の下書きなど、実用的な目的で書かれたものもあります。京大書道部の書展では、臨書作品の場合キャプションに臨書した法帖を掲示しています。ぜひ作品と見比べてご覧ください。

創作

臨書に対して、自分が表現したい言葉を書くことを創作と言います。自分で考えた言葉を書くこともあれば、漢詩や漢文、和歌や俳句、詩や短歌、歌詞などに題材を求めることもあります。

作品の構成や書体、書風は、選んだ言葉を最もよく表現できるように考えて工夫します。臨書の学習を活かし、古典の表現方法を取り入れると、作品に深みと味わいを出すことができます。

闇雲に言葉を書くのではなく、自ら感動や想いを言葉に託し、それに合った表現を探して書くのが創作作品です。

作品の構成―印と落款―

落款

作品の末尾に書く署名とそれに続けて押す印を落款・落款印と言います。名前のほか、語句の出典や臨書した古典の名、製作した場所や時間を書くこともあります。

印の種類

落款印以外にも、作品の右上（冒頭部分）に押す引首印や、自由な位置に押す遊印が加えられることがあります。

書の分野と有名古典について

漢字には楷・行・草・隷・篆の五つの書体があります。数千年前に、身の回りの事物を書き記さんとする行為によって象形的な篆書が生まれ、文字としての美しさや抽象性、実用性を求める中で隷書が発展しました。現代でもよく使われている楷書・行書・草書はこの篆書と隷書を基盤として作られた書体です。一方で、仮名・調和体は、日本が中国から漢字を輸入し独自に書法を発展させてきた結果生まれた書の分野と言えます。

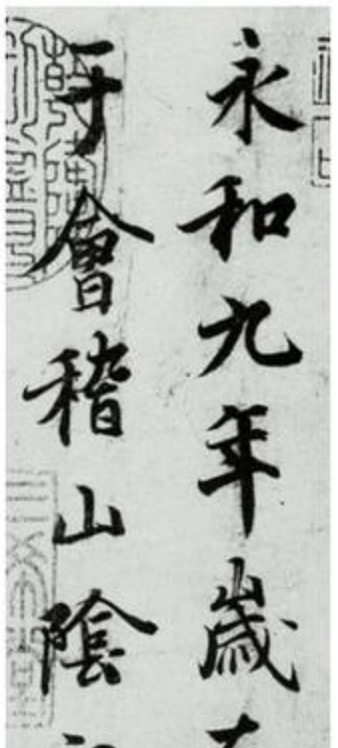
一口に〇書と言っても、書く者の呼吸や心の動き、如何なる結体を良しとするかという考え方や経験などによって、その書が持つ趣は変化します。そこに書の面白さや芸術性が在るのではないでしょうか。ぜひ以下の有名な古典や色々な作品などを見比べて、その面白さを体験してみてください。

「楷書」は永字八法と呼ばれる、点・画・転折・払いに関する一定の規則によって書かれる書体です。その書法は唐代に完成され、堂々たる威厳と流麗な美しさを併せ持つ素晴らしい古典が多く残されています。

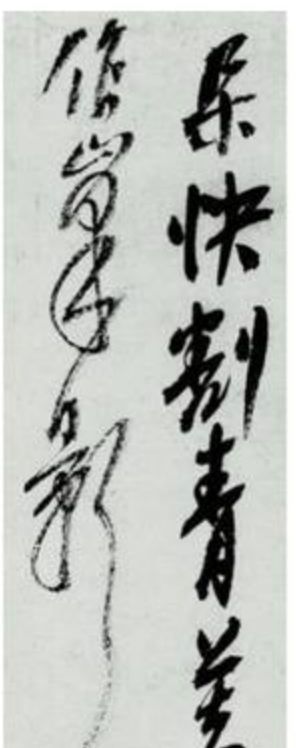


画像：九成宮禮泉銘（欧陽詢）

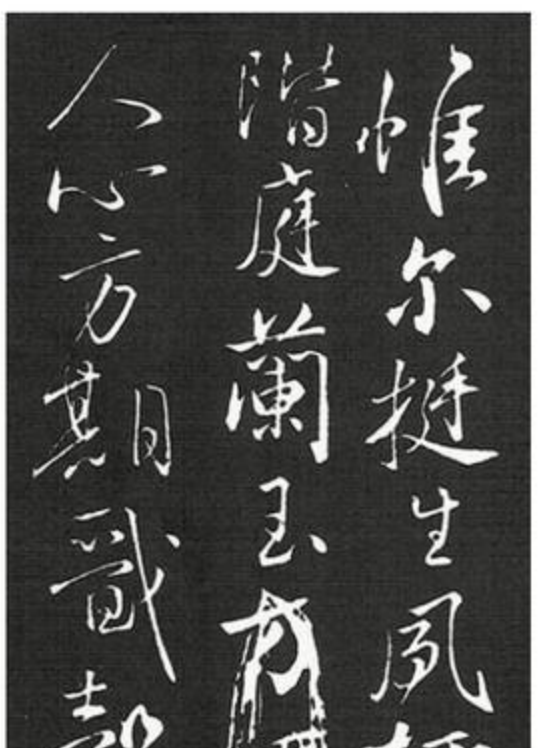
「行書」は一般的に隷書の速書き体として生まれたと言われており、点画を繋げたり省略したりして書かれる書体です。崩し方はさまざまで、曲線を軸とした流線的な書風もあれば、直線を軸とした力強い書風もあります。



画像：蘭亭序（王羲之）



画像：詩稿（呉昌碩）

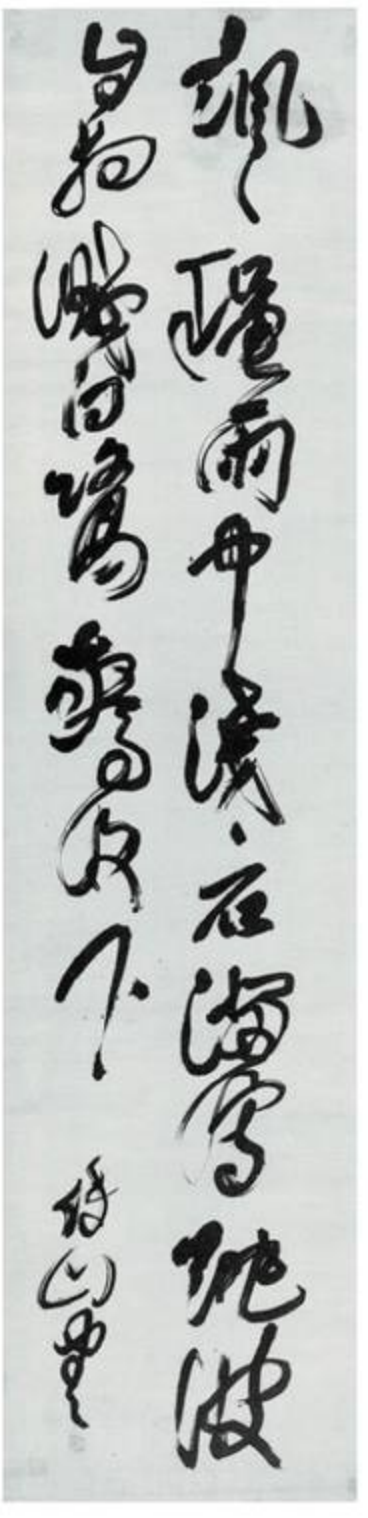


画像：祭姪文稿（顔真卿）

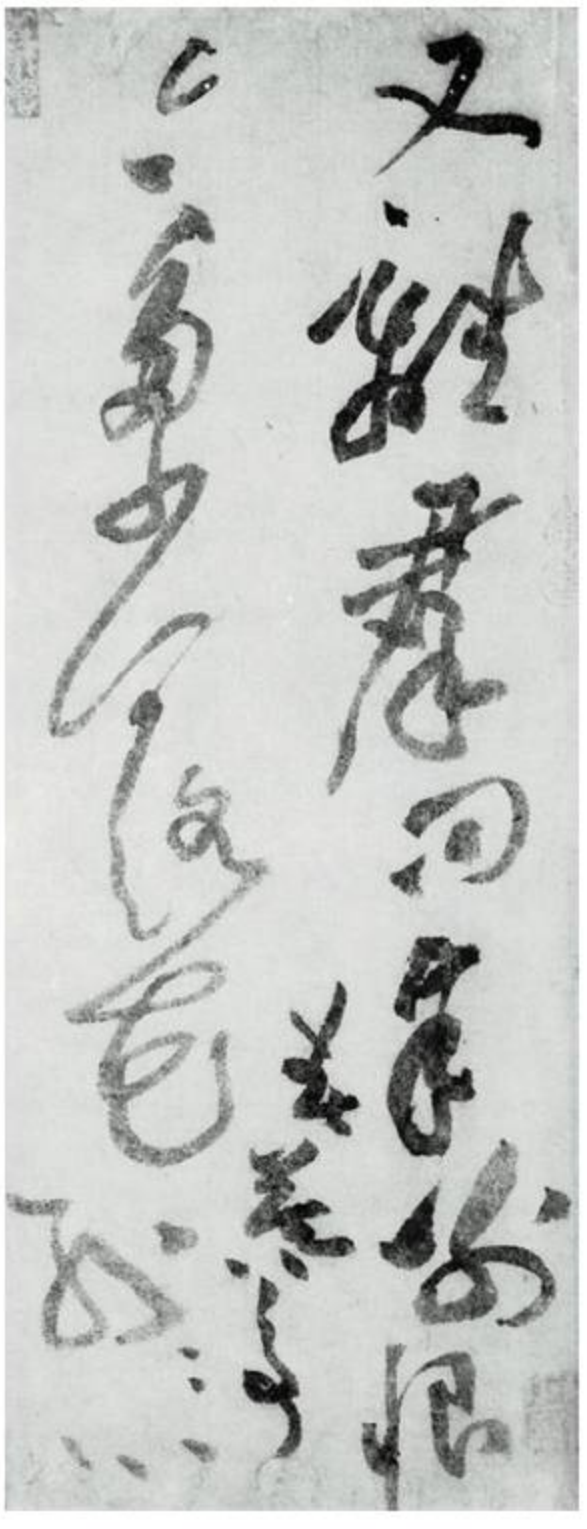
「草書」もまた隷書の速書き体として、漢代に起こった書体です。唐代までに一定の崩し方が確立された後、宋から明・清にかけて、その自由度の高さに表現性を見出した能書家らによって芸術性が高められました。



画像：十七帖（王羲之）

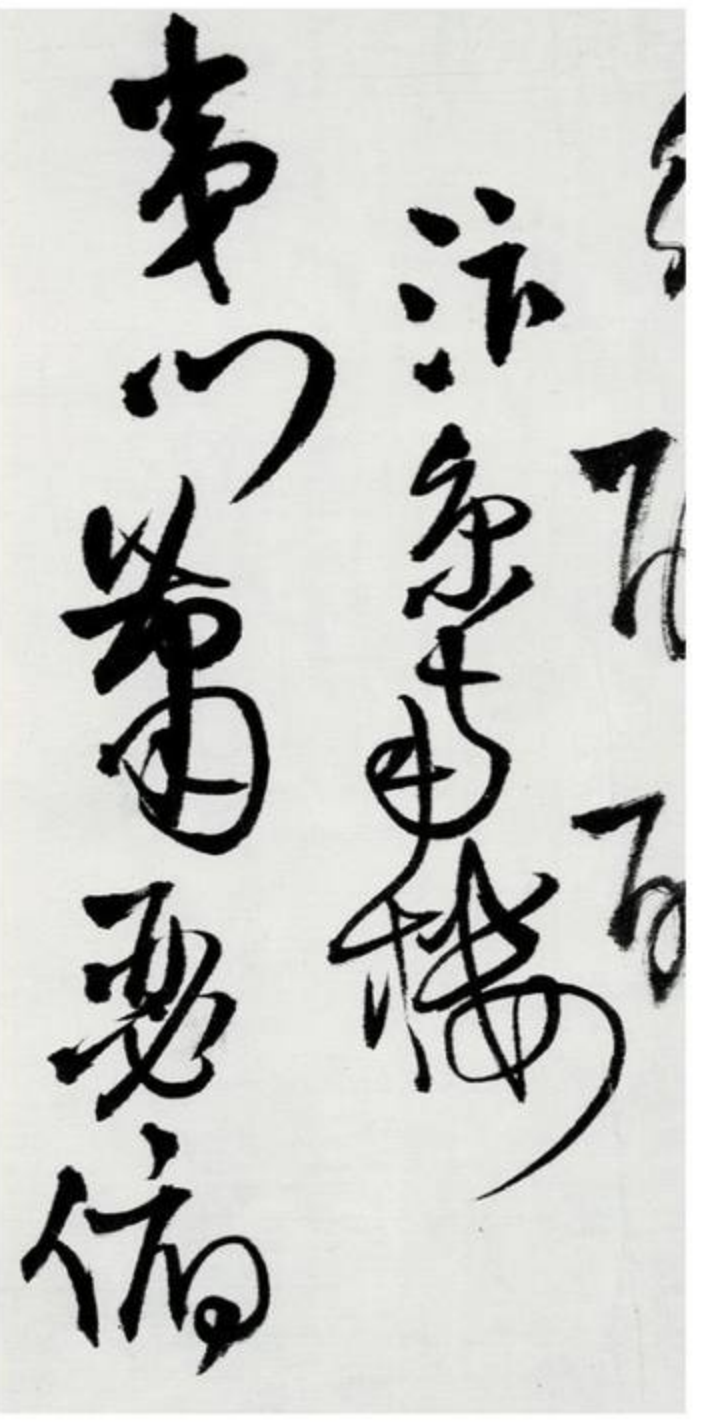


画像：五言絶句四屏（傅山）



画像：李太白憶旧遊詩巻（黄庭堅）

「隷書」は篆書から発展し、五体の中で唯一「波磔」と呼ばれる払いのような横画を持つ書体です。文字として整えられつつも篆書の象形的な字形が残っており、筆法もまだ習熟していない段階ともいえますが、かえってそこに造形美と素朴な古籀の風味を併せ持った魅力を見出すことができます。



画像：草書七律五首巻（王鐸）

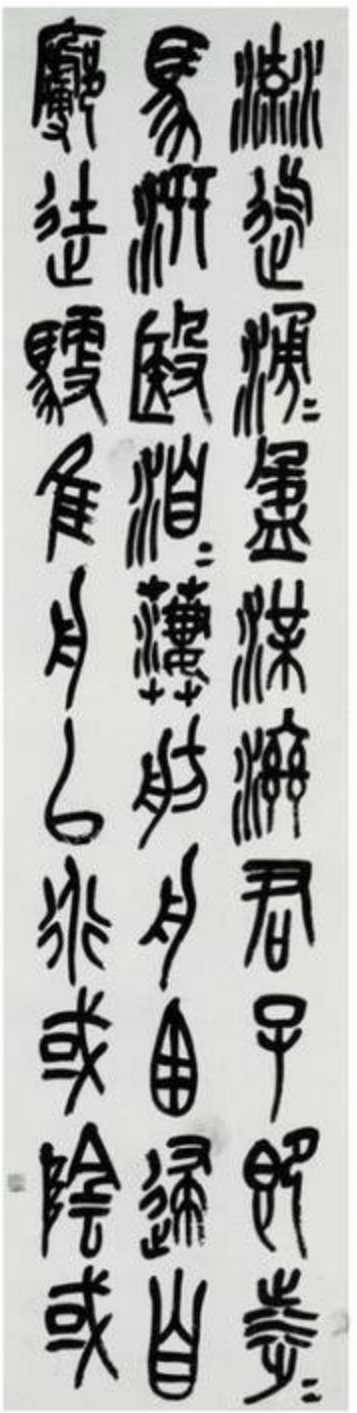


画像：曹全碑（筆者不明）

「篆書」はその絵的な造形に特徴がある最古の書体です。世界に存在する事物と文字とを初めて繋げた記号であり、その字形から想起されるイメージによって、豊かな表現性を持っています。漢字の意味を知らない人にも魅力が伝わる作品を書くことができます。



画像：石鼓文（筆者不明）



画像：臨石鼓文（呉昌碩）



画像：自書七言絶句十二屏（傅山）

「仮名」は日本語の音を割り当てた漢字の一部を変化させて作られた、日本固有の書法です。柔らかく流れのある運筆が特徴的で全体に寛雅な雰囲気を持っています。散らし書きという独自の構成法も漢字書には無い魅力の一つです。



画像：升色紙（伝藤原行成）

「調和体」あるいは**「近代詩文書」**は戦後に一般的な可読性を重視する動きによって起った書法です。文学作品や詩・短歌・俳句、歌詞やセリフといった題材を用いるので、文意を加味した文学性のある、また書道をしていない人にも親しみやすい作品を作ることができます。（著作権が気になるので画像はありません）

作品一覧

技術顧問
大原蒼龍
創作・『聲塵未泯』……10

二回生
植村亮
臨書・『長楽王丘穆陵亮夫人尉遅造像記』……11
創作・『李陵詩』……11
創作・『李嘉祐詩』……11
臨書・倪元璐『行草五言律詩軸』……12
臨書・米芾『蜀素帖』……14
創作・『古今和歌集 仮名序』……15
臨書・『楊准表記』……15
臨書・顔真卿『祭姪文稿』……24
臨書・顔真卿『祭姪文稿』……15
臨書・空海『風信帖』……24
創作・『満庭芳・山抹微云（秦観）』……16
創作・『上善若水』……19

齋藤　亜紀
永田はるな
松阪明日香
三木優奈
山田健太
リーイーウェイ
GONG　ZIQING

三回生
淺雛穂乃花
臨書・太宗『温泉銘』……17
創作・『百人一首』……17
創作・『池塘春草の夢』……21
臨書・蕭顯慶『孫秋生等造像記』……22
臨書・褚遂良『楷書千……12
臨書・楊峴『漢陳文範碑』……13
創作・『天朗氣清』……17
臨書・『趙猛龍碑』……22
創作・『茶摘み』……22
臨書・趙之謙『抱朴子語』……18
臨書・黄庭堅『松風閣詩巻』……18
臨書・『宣武帝婿司馬顯姿墓誌銘』……19
臨書・王義之『集字聖教序』……24

大林明日香
木下美優
木村隼翔
城本昌明
須田光太郎
鶴岡直穂
南出祐希
山下理子
由里本陽香

四回生
倉橋あい
創作・『観世音浄聖』……17
素鴻
創作・『「陋室銘」並序』……25
戸髙海
創作・『出師表』……23

乗杉玲壽
創作・『尸居』……19
創作・『雨を詠む歌』……16
創作・『傅山詩軸』……24

五回生
近藤毅
臨書・『召尊』……15
創作・『ひとことメッセージカード』……24

修士一回生
乾未樹
創作・『平生』……17

修士二回生
渡部裕貴
創作・『山口素堂の句』……24

合作

石本森羅（七回生）・戸髙海（四回生）・乗杉玲壽（四回生）
創作・『月の沙漠』……26
乗杉玲壽（四回生）・戸髙海（四回生）・松阪明日香（二回生）
臨書・顔真卿『裴将軍』……26
戸髙海（四回生）・乗杉玲壽（四回生）・石田あかり（四回生）・倉橋あい（四回生）
創作・『益者四友』……16
南出祐希（三回生）・永田 はるな（二回生）
創作・『檸檬』……25
戸髙海（四回生）・須田光太郎（三回生）
創作・『交創』……20
植村亮（二回生）・松阪明日香（二回生）
創作・『李中詩』……25
須田光太郎（三回生）・木村隼翔（三回生）
創作・『対聯ー紀昀の逸話による』……25
文学部合作／髙石京花（四回生）・木村隼翔（三回生）・坂田侑美奈（三回生）・城本昌明（三回生）・須田光太郎（三回生）・南出祐希（三回生）・永田はるな（二回生）・結依（二回生）
創作・『京都之四神相応』……20

三回生合作

淺雛穂乃花、浅山桃佳、木下美優、木村隼翔、城本昌明、鶴岡直穂、南出祐希、山下理子、坂田侑美奈、由里本陽香、渡辺紗英、二宮海椰、須田光太郎、中西結希乃、大林明日香
臨書・王義之『集字聖教序』……20

全体合作

創作・『笹飾り～天の川に願いを～』……21

作品紹介

賛助作品

技術顧問　大原蒼龍

○西来院作品

『聲塵未泯』



○西来院

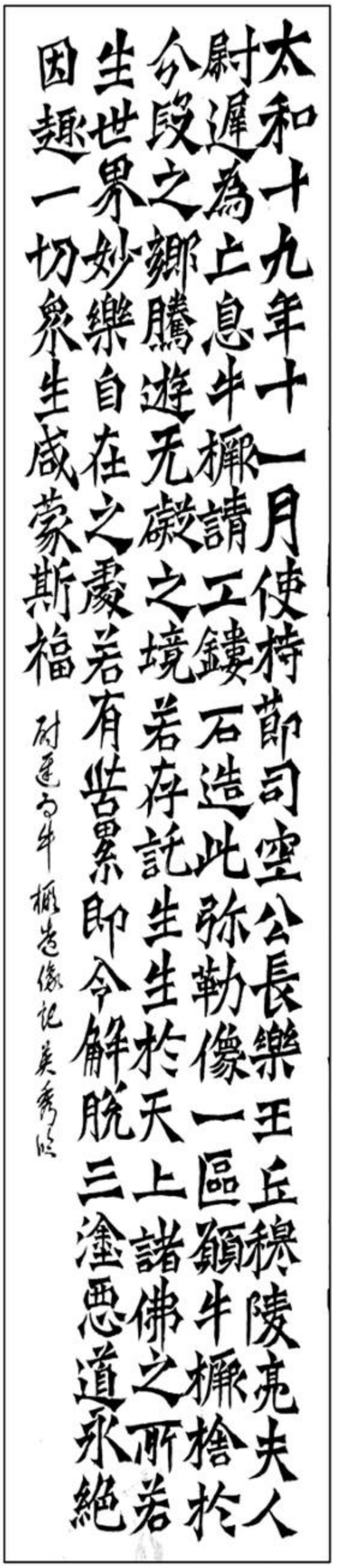
1

植村亮（二回生）

臨書　楷書　『長楽王丘穆陵亮夫人尉遲造像記』　二八

「太和十九年十一月使持節……」

疲れました、、、



2

植村亮（二回生）

創作　行草　『李陵詩』　二八

「嘉會難再偶三載為千秋……」

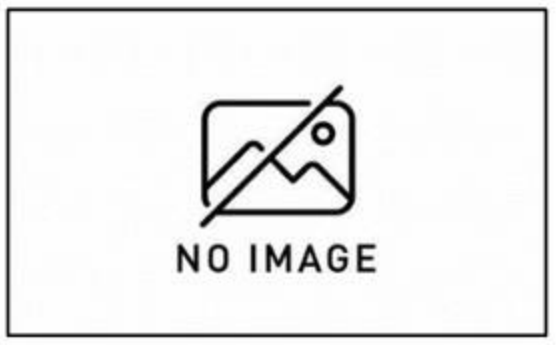
傅山味を出したい



3

木下美優（三回生）
臨書　楷書　蕭顯慶『孫秋生等造像記』　二八

「大伐太和七年…」
なかなか根気がいる作品でしたが造像記が好きという思いを感じてもらえると嬉しいです。



4

齋藤亜紀（二回生）
臨書　行草書　倪元璐『行草五言律詩軸』　二八

「滿市花風起平隄漲水流子共春初手更晩停舟上埭天連雁雲氣祠水牛杖藜聊復尒轉盼夕陽游似樂山辞丈。」
初の二八作品です。今までの作品の中で一番書き込みました！



5

城本昌明（三回生）

臨書　隷書　楊峴『漢陳文範碑』　二八

「先生諱泰。字林宗。大原介休人也。其先出自有周。王季之穆。有號叔者。寔有懿德。文王咨焉。建國命氏。或謂之郭。」

楊峴作品の臨書です。隷書はよい。



6

戸髙海（四回生）

創作　仮名　『雨を詠む歌』　二八

この季節の雨を詠む和歌を集めて書きました。歌の選定が間に合わなかったので、釈文と作品写真はありません。悲しい～～～。

7

永田はるな（二回生）

臨書　行書　米芾『蜀素帖』　二八

「青松勁挺姿凌霄耐屈盤種々出枝葉牽連上松端秋花起絳烟旖旎雲錦殷不羞不自立」

初の二八作品です。



8

乘杉玲壽（四回生）

創作　行草書『傅山詩軸』　二八

「晋公千古一快逢吉敬信朱晦翁独論祧庙事不肯傅会可謂善争道学者矣鼓咎路謗輩皆一節具足視粟也難矣抑之孝友無時不可亦不敢以時而」

筆の赴くまま書き上げました。



9

松阪明日香（二回生）
臨書　隷書　『楊淮表記』

「故司款校尉楊君……」
自由にのびのびと書きました。

10

三木優奈（二回生）
臨書　行書　顔真卿『祭姪文稿』　二六

「惟爾挺生夙撰幼徳宗廟瑚璉階…」
古典の性質上、感情移入しながら臨書しました。文字に表れていたらいいなと思います。


故司款校尉楊君廉謹淮宇伯邓舉孝
廉尚書侍郎上蔡雒陽令持軍長史任
城金城河東山陽大守御史中丞三
零月帖


惟尔挺生夙撰幼徳宗廟瑚璉階
庭蘭玉方遇積善每慰令
方期藏毅何圖逆賊間

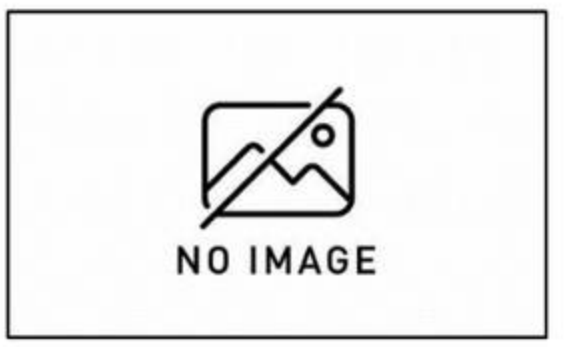
11

リー　イーウェイ（二回生）
創作　行草　『満庭芳・山抹微云』　二八

「山抹微雲、天連衰草、畫角聲斷譙門。暫停徵棹、聊共引離尊。多少蓬萊舊事、空回首、煙靄紛紛。斜陽外、寒鴉萬點、流水繞孤村。銷魂。當此際、香囊暗解，羅帶輕分。謾贏得、青樓薄倖名存。此去何時見也」

何回書いても楽しい作品です。

風に吹かれたら形が崩れそうくらい、軽くて儚い煙を頭の中にイメージして書きましたが、所々に太い線を入れて、別れに伴う悲しみの激しさを表現しようとしました。



12

戸髙海（四回生）、乘杉玲壽（四回生）、石田あかり（四回生）、倉橋あい（四回生）
創作　行書　『益者四友』　二八

『益者四友』

益者三友をもじって書きました。意味は、交際してタメになる3種の友人のこと、です。



13

淺雛穂乃花（三回生）

臨書　行書　太宗『温泉銘』　半切

「夕。飛炎雪晨。林寒尚翠。谷暖先春。年序」

のびのびとした字に惹かれて選びました。その字のもつ自由さを残しながら、作品としてバランスよくまとめることを意識しました。



14

乾未樹（修士一回生）

創作　行書　『平生』　半切

「平常心是道」

日常の積み重ねが『道』であり、特別なものを考えたり掴んだりすることではない。書道に向き合っていると、あれやこれやの思考から解放されます。

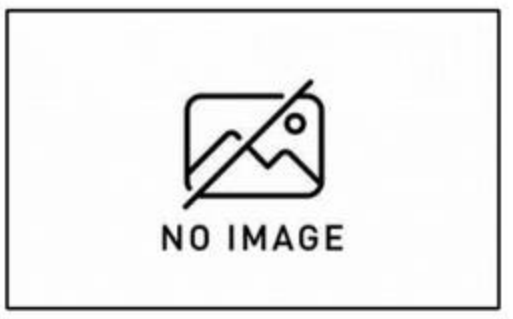


15

木村隼翔（三回生）

臨書　楷書　褚遂良『楷書千字文』　半切横

褚遂良の楷書千字文の一部を臨書してみました。いつかは千字文すべてに挑戦してみたいものです。



16

倉橋あい（四回生）

創作　隷書　『観世音浄聖』　全紙

「福寿海無量　慈意妙大雲　澍甘露法雨　是故応頂礼」

バランス難しいっっ。



17

近藤毅（五回生）

臨書　篆書　『召尊』　半切



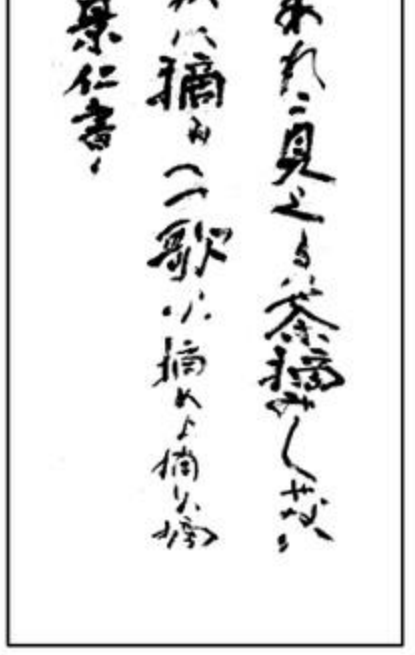
「白■父賜召白馬■黄髪嫩。用■不■召。多用追于炎不■白■父賄。召」

文字と絵の境目のような金文の文字の魅力は、活字では失われてしまったいきいきとした素朴なエネルギーだと個人的に思っています。そこが感じられる作品を目指しました。

18

須田光太郎（三回生）

創作　調和体　『茶摘み』　半切



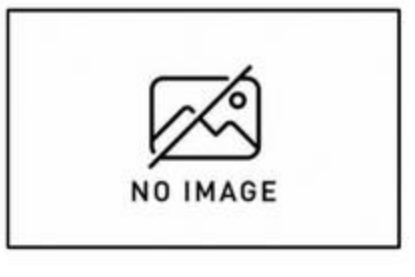
「夏も近づく八十八夜野にも山にも若葉がしげる……」

行間の余白の置き方や漢字・かなの一字一字の字形を意識して書いてみました。見ていただいた方の率直な感想を聞いてみたいです。

19

鶴岡直穂（三回生）

臨書　楷書　趙之謙『抱朴子語』　全紙



「天員如張盖地方如……上磨左旋而蛾右去」

ガッと力強くてゴツゴツした字形に雰囲気的な締りを感じ、久々の出品への気合いも込めてこの字を選びました。部員の皆さんに貪欲に教わりながら練習に励んでいきたいです。

20

戸高海（四回生）

創作　行草書　『戸居』　一六横

「戸居而龍見、淵默而雷聲、神動而天隨、從容無為而萬物炊累焉」

全体に雷が走るような動きのある作品を目指しました！



21

山下理子（三回生）

臨書　楷書　宣武帝婿『司馬顯姿墓誌銘』　半切

「撫嬪御使螽蟄重作帝観其無忌之懐感」

初めてちゃんとした作品をかきました。書体が好きだったのでこの墓誌銘を選びました。

撫嬪御使螽蟄重作帝
觀其無忌之懷感

22

GONG ZIQING（二回生）

創作　行書　『上善若水』　半切1/2横

「上善若水　水善利万物而不争　処众人之所恶　故几于道」



23

戸髙海（四回生）、須田光太郎（三回生）、坂田侑美奈（三回生）、城本昌明（三回生）、
創作　行草書　『交創』　半切二連

「青門日暖塵光動　紫陌花晴風色来」

同じ詩文でそれぞれ草稿を作って、交換し、相手の草稿を元に自分なりに拡張して創作作品を作るという試みです。本来一人で創作するときのプロセスを二人で行うことで、一人だけでは到達できない作品を作れたら良いな～。



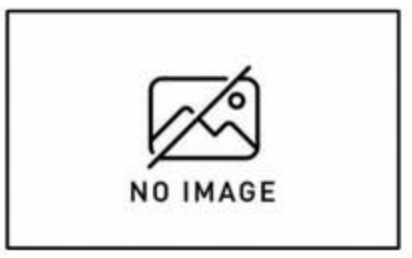


24

髙石京花（四回生）、木村隼翔（三回生）、坂田侑美奈（三回生）、城本昌明（三回生）、
須田光太郎（三回生）、南出祐希（三回生）、永田はるな（二回生）、結依（二回生）
創作　調和体　『京都之四神相応』　色紙四連

「青龍。朱雀。白虎。玄武。」

文学部二・三・四回生で合作やってみました！！それぞれの個性が活かせてれば嬉しいです。



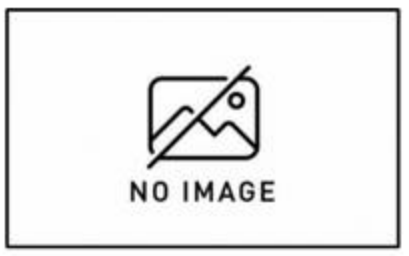
25

三回生合作／淺雛穂乃花、浅山桃佳、木下美優、木村隼翔、城本昌明、鶴岡直穂、南出祐希、山下理子、坂田侑美奈、由里本陽香、渡辺紗英、二宮海椰、須田光太郎、中西結希乃、大林明日香

臨書　行草書　王羲之『集字聖教序』　全紙横

「哉。玄奘法師者。夙懐総令。立志夷簡。神清齠齔」

三回生の字を集めました。



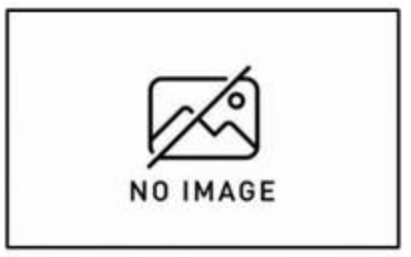
○禅居庵

26

全体合作

創作　調和体　『笹飾り～天の香具川に願いを～』

願い事、目標を各々の字で綴りました！この人にはこんな野望があったのか…という、部員の新たな一面を発見できるかも？



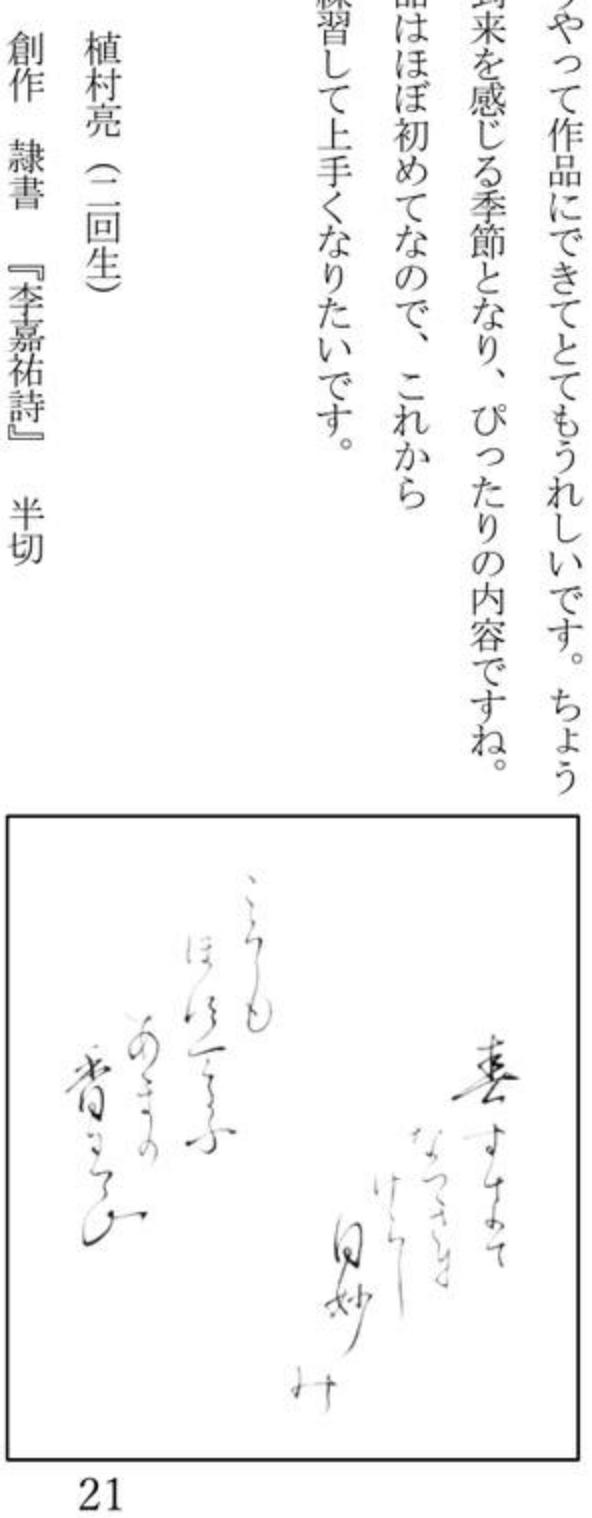
27

浅雛穂乃花（三回生）

創作　仮名　『百人一首』色紙

「春過ぎて 夏来にけらし 白妙の 衣ほすてふ 天の香具山」

入部したときからずっと書きたいと思っていた和歌なので、こうやって作品にできてとてもうれしいです。ちょうど夏の到来を感じる季節となり、ぴったりの内容ですね。仮名作品はほぼ初めてなので、これからもっと練習して上手くなりたいです。



28

植村亮（二回生）

創作　隷書　『李嘉祐詩』　半切

「千峰鳥路含梅雨。五月蟬聲送麦秋。」



29

大林明日香（三回生）

創作　楷書　『池塘春草の夢』　半紙

「池塘春草の夢」

この言葉の意味である、青春時代の楽しさや儚さを文字で表現しようとしました。



30

近藤毅（五回生）

創作　篆書　『ひとことメッセージカード』

日常で使えるような作品を作ってみたいなと思い試しました。なんか見返りがあればご要望に応じて作ります（強欲）。

31

城本昌明（三回生）

創作　隷書　『天朗氣清』　半切

「天朗氣清」

初夏の澄んだ空を思い起こしつつ、『蘭亭序』の一節を創作しました。

32

須田光太郎（三回生）

臨書　楷書　『趙猛龍碑』　半切

「興是。賴大夫張老。春秋其聲績。」

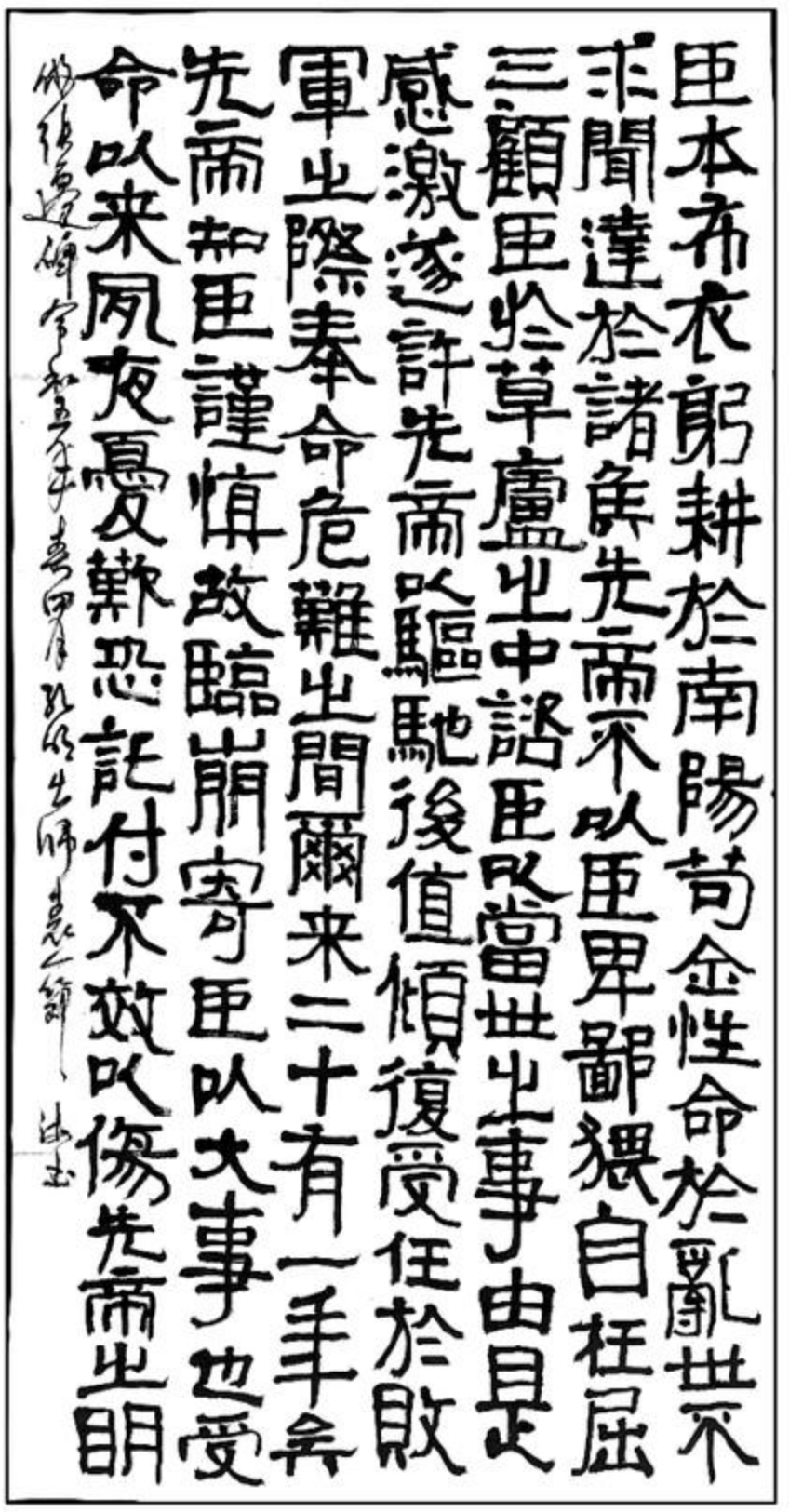
自分だけの楷書を求め、模索中。



33

戸髙海（四回生）

創作　隷書　『出師表』　全紙


臣本布衣、躬耕於南陽、苟全性命於乱世、不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以当世之事。由是感激、遂許先帝以駆馳。後値傾覆、受任於敗軍之際、奉命於危難之間。爾来二十有一年矣。先帝知臣謹慎、故臨崩、寄臣以大事也。受命以来、夙夜憂歎、恐託付不効、以傷先帝之明。」

張遷碑を元に、石に刻みつけたような深さのある線と、エネルギーを感じる少し屈折したような造形を表現できればと思って書きました。

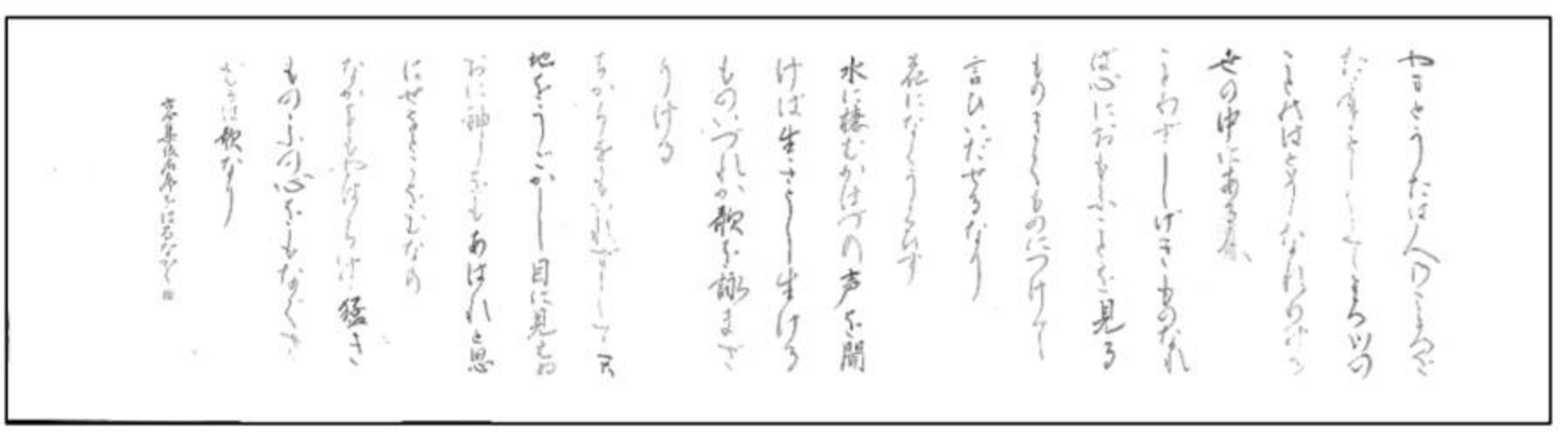
34

永田はるな（二回生）

創作　仮名　『古今和歌集 仮名序』　半切

「やまとうたは人のこころをたねとして、よろづのことのはとぞなれりける……」

昨年製作しました。紙の色がとても気に入っている作品です。



35

松阪明日香（二回生）

臨書　行書　顔真卿『祭姪文稿』　半切

「天不悔禍、誰為荼毒。念爾遘殘、百身何贖。」初の行書作品です。力強いのに悲しさが感じられる字を目指しました。



36

山田健太（二回生）

臨書　行書　空海『風信帖』　半切

「風信雲書自天翔臨　披之閲之如掲雲」

「雲」や「天」の字が漂う「空」「海」の「風」信帖の冒頭部です。こう書くと自然の趣溢れる漢字たちが多くてなんとも心が踊りますね。最澄の書を見て「これを読むと雲霧を払いのけ天を仰ぐようだ」と評する部分です。私も負けじと、そのような見るに心の晴れる爽やかな書を目指しました。



37

由里本陽香（三回生）

臨書　行書　王義之『集字聖教序』　半切

「有玄奘法師者。法門之領袖也。幼懐貞敏。」字体に統一感を持たせて一つの作品としてまとまりが出るように工夫しました。



38

渡部裕貴（修士二回生）

創作　調和体　『山口素堂の句』　半切

「目には青葉山時鳥初鰹」

視覚・聴覚・味覚で感じる初夏についての句です。暑さを吹き飛ばせるような、さわやかなイメージで書き上げたい（書き上げるとは言ってない）。

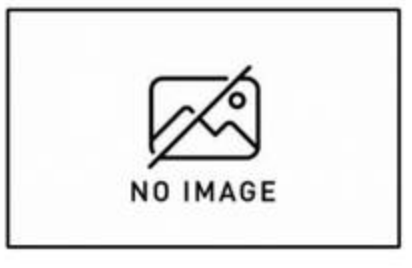


39

素鴻（四回生）
創作　行書　『陋室銘』並序　全紙横

「山不在高、有仙則名。水不在深、有龍則靈。斯是陋室、惟吾德馨。苔痕上階綠、草色入簾青。談笑有鴻儒、往來無白丁。可以調素琴、閱金經。無絲竹之亂耳、無案牘之勞形。南陽諸葛廬、西蜀子云亭。孔子云：何陋之有？」

夫天下大夫無不有以古勉己者是銘乃予自勉之嗜書自辛丑年即三年前彼時天下亂匪疫予心擾友女不得安故試書是銘以陋卑之字懸於齋壁毎日擧頭輒字文入得以自省雖時遷三載尚不失意義猶是序情同彼時為物所刑又思是作不曾列於展而此回又無精以劈另作故重拾而展。



41

南出祐希（三回生）、永田はるな（二回生）
創作　硬筆　『檸檬』　便箋二連

「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終壓へつけてゐた。…」

念願の硬筆作品出品です。便箋は丸善で購入しました。





42

須田光太郎（三回生）、木村隼翔（三回生）
創作　隷書　『対聯―紀昀の逸話による』　半切2／5二連

「色難。容易。」

『四庫全書』を編纂した紀昀は、あるとき「色難」と書いてある上聯を見た乾隆帝に、「この下聯はどのような言葉が入るのか」と聞かれ、「容易です」と答えたらしく、乾隆帝は最初それが当意即妙な返しであることに気づかなかったそうです。その対聯がどのようなものか二人で想像しながら作品にしてみました。

40

植村亮（二回生）、松阪明日香（二回生）
創作　篆書　『植村亮、松阪明日香「李中詩」』　半切二連

「竹風醒酔窓月伴吟」

二回生二人で篆書合作をしました。一体感が出ていたら嬉しいです。



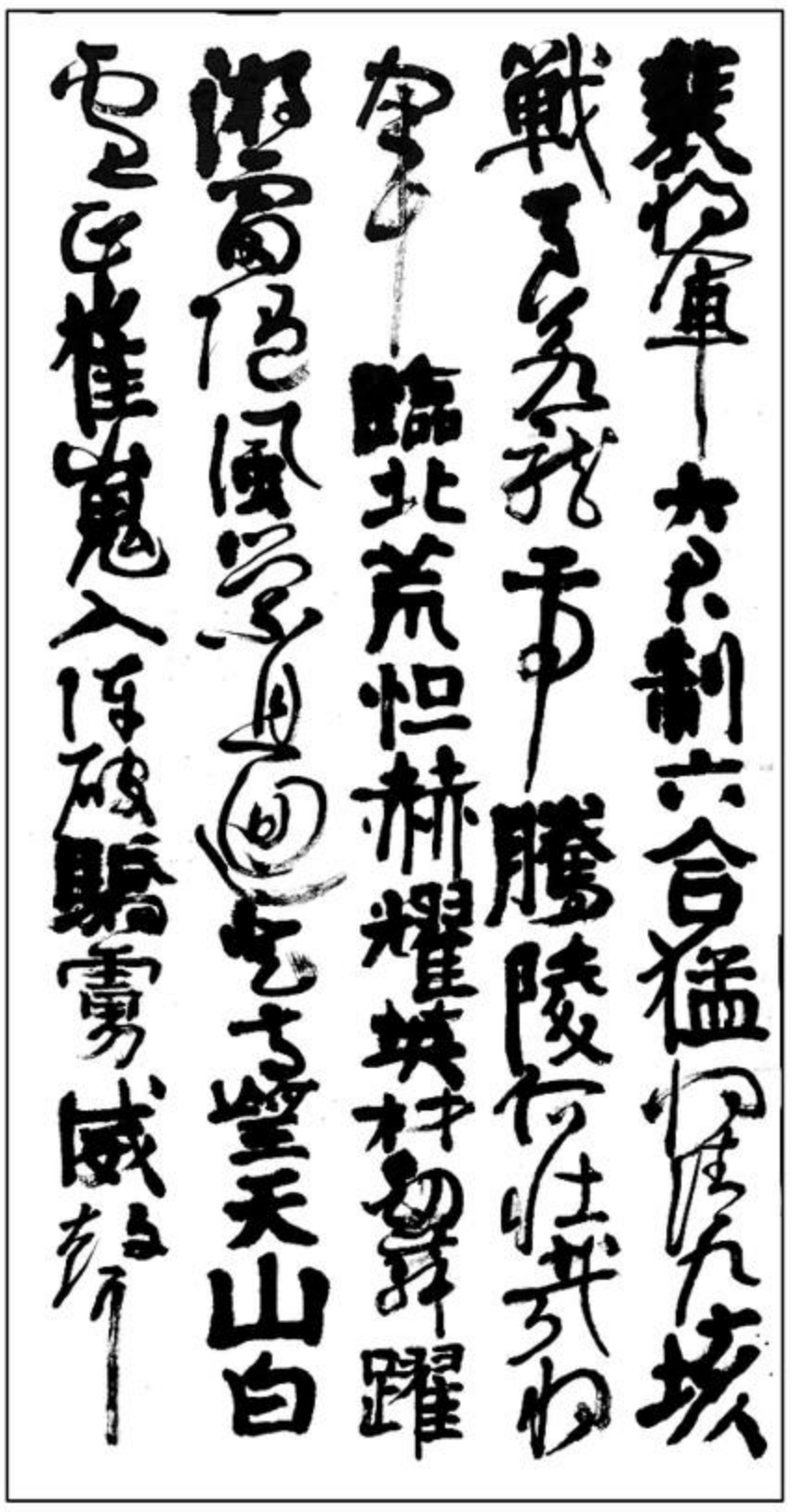


43

戸髙海（四回生）、乗杉玲壽（四回生）、松阪明日香（二回生）
臨書　破体書　顔真卿『臨裴将軍』　全紙

「裴将軍　大君制六合　猛将清九垓　戦馬若龍虎　騰陵何壮哉　将軍臨北荒　恆赫耀英材　劒舞躍遊雷　隨風縈且廻　登高望天山　白雪正崔嵬　入陣破驕虜　威聲」

顔真卿への愛を込めて。

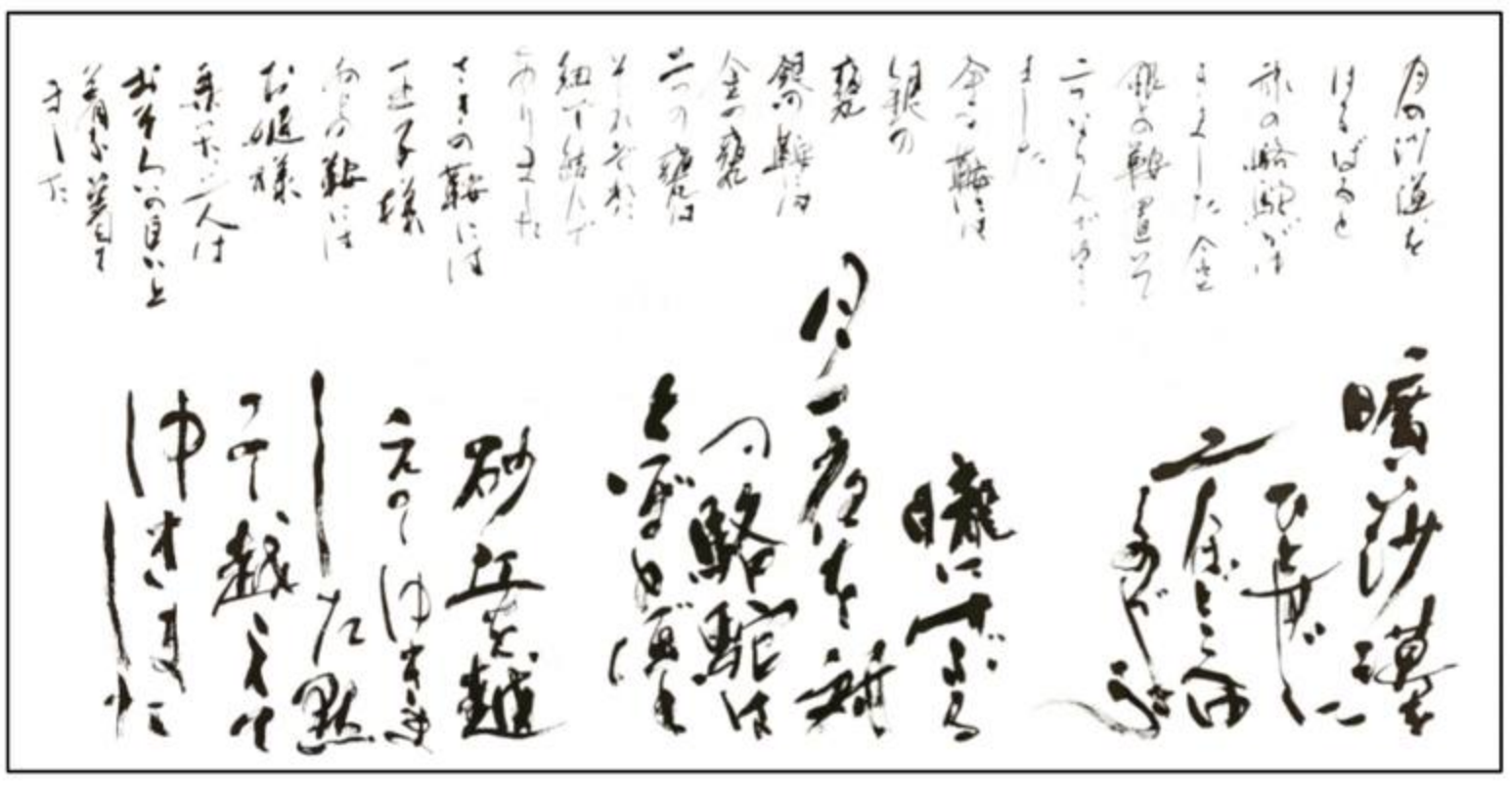


44

石本森羅（七回生）、戸髙海（四回生）、乗杉玲壽（四回生）、松阪明日香（二回生）
創作　調和体　『月の沙漠』　全紙

「月の沙漠をはるばると……黙って越えてゆきました。」

合宿で行った鳥取砂丘に想いを馳せて書きました。



【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科准教授　成田健太郎

京都大学附属図書館　図書館企画掛主任　行友三輪子

技術顧問：日展会友　書家　大原蒼龍

一回生

法　石井陽太

京女　岩﨑沙奈

工　影山稜真

工　加藤杏次郎

法　亀井歩武

京女　川上雪乃

工　篠原丈

工　鈴木理仁

農　妹尾直弥

農　戸邊晃平

同志社　中野花音

総人　樋口珠穂

文　廣田千裕

農　福田朗子

農　松田陽南子

医　吉田慎二郎

二回生

総人　植村亮

文　大隈倫希

工　大原佳奈

京薬　川﨑麻衣

薬　GONG　ZIQING

総人　齋藤亜紀

文　永田はるな

理　中野葵

日研生　パクジョン

総人　松岡加純

農　松阪明日香

阪大　三木優奈

工　宮原康輔

医　山田健太

文　リーイーウェイ

三回生

薬　淺雛穂乃花

経済　浅山桃佳

農　大林明日香

医　木下美優

文　木村隼翔

医　小谷大翼

文　坂田侑美奈

文　城本昌明

文　須田光太郎

農　鶴岡直穂

法　中西結希乃

総人　二宮海椰

文　南出祐希

医　森田歩

工　山下理子

薬　由里本陽香

理　渡辺紗英

四回生

教育　飯田望未

法　石田あかり

京女　大西沙穂

兵医　岡雅博

理　倉橋あい

理　凌楡凱

文　髙石京花

農　戸髙海

理　乗杉玲壽

五回生

医　釜田弘一朗

医　近藤毅

七回生

文　石本森羅

修士一回生

農　乾未樹

文　白植寛

農　大庭悠輝

修士二回生

理　秋友祥香

総人　伊藤迅亮

農　岩田恵理子

工　坂崎亜実

農　柴田達哉

農　服部佳乃子

工　渡部裕貴

文　楊子怡

経済　金一鳴

博士一回生

理　吉田凌祐

博士二回生

理　中村勇真

工　金祺民

博士三回生

理　原誠人

博士四回生

経済　沙錦平

書道用品と表装・額装
書遊
充実のECショップ 書遊Online 書遊 検索
ポイントがとってもお得なオンラインショップ https://shoyu-net.jp/
書遊奈良本店 〒630-8243 奈良市今辻子町３７
TEL.0742-23-5547／ FAX.0742-20-2261
書遊大阪店 〒553-0003 大阪市福島区福島 5-14-6 クレセントビル 2F
TEL.06-6458-8808／ FAX.06-6456-4077
書遊京都店 〒604-8132 京都市中京区高倉通三条下る丸屋町 164
TEL.075-251-7800／ FAX.075-251-7802
LINE 公式アカウント
お得なクーポン、SALE情報の配信！
道具の豆知識を共有！得すること間違いなし。
「友だち追加」で QRコードを選択！ 書道が楽しくなる！

墨筆硯紙 書道用品一式
京都 古梅園
〒604-0916
京都市中京区寺町二条上る
TEL：075 231 1531
FAX：075 231-0272

京都二条 銘筆・名硯・古墨・文房四寶の店
香雪軒
〒604-0912 京都市中京区二条通河原町東入ル
桶之口町474番地
営業時間 10:00-19:00（不定休）
Tel 075-231-1695
Mobile 090-3495-4060

京筆・京文房
りゅうしどう
龍枝堂
京都 〒604-0916 京都市中京区寺町通二条上ル
TEL:075-252-4120 FAX:075-252-0006

かな料紙・京染和紙
加工紙・画仙紙・半紙他
書道用和紙の専門店
紙の津久間
京都市下京区新町通花屋町下ル
TEL (075) 371 - 8186 (代)
FAX (075) 371 - 8189

京都・書道用具店
松楳園
一般用の書道道具からプロ専用の用具まで幅広く取り揃いしております。小売もしておりますので、お気軽にお越し下さい。
取扱商品
書道用具全般
毛筆・松楳園製
毛筆・中国製
墨・墨液 各種
紙・漢字・かな用
硯・下敷・印材
他・書道小物
水墨画用具
京都市下京区柳馬場通仏光寺下る万里小路町164
TEL 075-351-6380 FAX 075-361-8006
http://:www.shoubaien.co.jp 定休日(日・祝日)

京都市中京区の表具展
青緑堂山中表具店
〒604-8102
京都市中京区姉小路富小路西入ル菊屋町 567
TEL：075-221-3381 FAX：075-252-1987
http://yamanaka-hyouguten.com

文房四寶(筆・墨・硯・紙)和紙工芸品 書画作品
書芸サロン 賛交
株式会社 賛交社
〒605-0992
京都市東山区鞘町通七条上ル下堀詰町 242
TEL/075-541-1112 FAX/075-541-1113
E-mail/info@shoga-sankou.co.jp

—建仁寺案内図・周辺地図—



ご来場ありがとうございました。

京都大学書道部



This book was
made by the LeME